

[講演要旨] 1611 年慶長奥州地震津波の歴史的評価について

蝦名裕一*(東北大学災害科学国際研究所)

§ 1. はじめに

1611 年 12 月 2 日(慶長十六年十月二十八日)に発生した慶長奥州地震津波については、2011 年の東日本大震災を契機として歴史資料の再解釈やこれに基づく地震規模の再検証、新たな津波堆積物が発見などの知見が得られ、従来とはその評価が大きく変容しつつある。一方、これにより慶長奥州地震津波について評価が分かれている部分もある。例えば、東北地方太平洋沿岸から検出される津波堆積物について、貞観津波の堆積物以降に津波堆積物は炭素 14 年代測定法の精度では、慶長奥州地震津波とするか、または『王代記』に記される 1454 年の享徳地震とするか、評価の分かれる所である。また、その地震規模も東日本大震災を超える超巨大地震であった可能性も残されている。

本発表では、歴史資料の分析をベースとして、慶長奥州地震津波および東北地方太平洋沿岸で発生した歴史津波に関する歴史情報を整理し、歴史学研究の視点から述べられる範囲を示しておきたい。

§ 2. 東北地方太平洋沿岸域における歴史津波を示す史料・伝承

文献調査で確認東北地方太平洋沿岸の歴史津波について、869 年の貞観津波について記す『日本三代実録』、享徳津波について記す『王代記』はいずれも遠隔地において成立した史料である。

東北地方太平洋沿岸において成立した史料で、1611 年の慶長奥州地震津波について記載した主立った史料を地域別に列挙すると次のようになる。

①盛岡藩域

- (a)宮古地域…『小本家記録』、『宮古由来記』など
- (b)津軽石地域…『古来之覚書事』(盛合家文書)
- (c)山田地域…『武藤六右衛門所蔵古文書』など
- (d)大槌地域…『大槌古館由来記』など

②仙台藩域

- (a)『真山記』、『記録抜書』、『貞享書上』
- (b)『駿府政事録』* 駿府(現静岡市)で成立。
- (c)『ビスカイノ報告』* スペインで成立。

③相馬中村藩域

- (a)『利胤朝臣御年譜』

ただし、これらの史料には 1611 年以前に津波に関する情報は存在しない。

1896 年に明治三陸津波の被災地を踏査した山奈宗真は、『大海嘯取調書』で 1257 年(正嘉元年)8 月 23 日に宇部村付近で津波があったこと、また『岩手県沿岸古地名考』で 40 地点の津波由来地名を紹介し、それぞれを建久、明応、慶長の津波に由来する

と記している。ただし、山奈が踏査の際の情報を記した野帳『岩手県海岸巡回古文書収集録』には、年代を明記した記述は現時点で確認できず、山奈の著作の成立過程をふまれば、これらは後年の山奈の推定であり、現地に年代を特定できる津波伝承が残っていたわけではないと考え得る。

§ 3. 地形復元に基づく伝承の検証

宮古市に残る史料『古実伝書記』によれば、小山田から八木沢に至る途中に、慶長の津波によって舟が漂着した伝承に基づく「柿沢」という地名が存在する。また、宮古市田の神には江戸時代の津波によって舟を繋留した「一本柳」の伝承が残されている。これらの津波到達伝承は、東日本大震災の浸水範囲よりさらに高所ないし内陸となり、ここから考えれば慶長奥州地震津波は東日本大震災以上の地震規模であるともとらえられる。しかし、1874 年に成立した「陸奥国閉伊郡宮古村書上絵図面」などから、今日の人工改変地形を除去し、本来の自然地形を復元して考えると、これらの伝承地点は人工改変以前の旧河川上に位置しており、津波の河川遡上として説明が可能になる。(図 1)

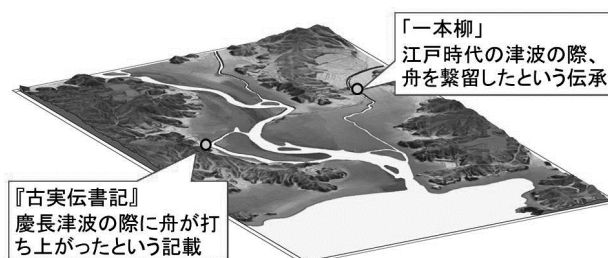


図 1. 宮古地域の復元地形(作成:菅原大助)

§ 4. おわりに

慶長奥州地震津波および東北地方太平洋沿岸の歴史津波について、歴史資料分析から述べられる点は以下の通りである。

①貞観以降から前近代にかけて、東北地方太平洋沿岸に広域的に津波被害をもたらした津波として、歴史資料から明確に確認できるのは 1611 年の慶長奥州地震津波である。1454 年の享徳地震については、東北地方の史料・伝承からは被害の広域性は確認できない。

②慶長奥州地震津波において、東日本大震災よりさらに内陸の津波痕跡地点については、歴史地形の復元により津波の河川遡上として説明することが可能であり、慶長奥州地震津波の地震規模は東日本大震災のそれに前後するものと判断できる。